



至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

先日、スイス・ジュネーブにある世界最大規模の素粒子物理学の研究所である欧州原子核研究機構（CERN）を訪問し、国際部長等職員の人たちと懇談し、最新の原子核物理学の立場からの宇宙創造の原理についてお話を聞いた。その中で、「宇宙は物質ではなくエネルギーによって創造された」という理論を実証しようとしていることを知らされ、大変興味を持った。

面白いことに、戦前の神道家・今泉定助氏による古事記の天地創造の解釈もまた、この最先端の科学が予想する宇宙の創造と同じ原理のことを言っている。古事記の冒頭「天地（あめつち）の初発（はじめ）」に成れる神は、「天之御主神（あめのみなかぬしのかみ）」、「高御産靈神（たかみむすびのかみ）」、「神産靈神（かみむすびのかみ）」とある。

できるなら、記憶という紙に印刷したい。

心に触れる印刷物でなければ、生き残っていない。コミュニケーションの手段として重宝されている印刷。あふれる印刷物の「必要」「不必要」を人々は即座に選択する。その判断基準は、記憶に残るか残らないかである。切り捨てられた物たちは、その情報の真意を届けることなしに葬り去られてしまう。その運命は冷酷無比。

では、どうすればよいか。記憶という紙が存在するなら、そこに印刷したいと私たちは切実に考える。こんなに技術が進み、印刷可能な素材も多様になっているのに、それは無理な相談。不可能とあらば、人の記憶に感動を刷り込むため、私たちはあらゆる手段を用いようと思う。

＜事業内容＞

- ・印刷物全般（名刺 / 封筒 / 伝票 / ポストカード / カタログ etc）の作成
- ・包装パッケージ（箱、袋、シール、ネーム、POP etc）の企画製造
- ・ノベルティ、記念品、芸能プロダクショングッズの企画製造
- ・ペット商品：フン処理袋「わんちゃんトイレッシュ」製造販売

袋ごとトイレに流せる  処理袋
わんちゃんトイレッシュ®

主要素材：ポリビニールアルコールフィルム水解紙



 株式会社 新進社

<http://www.shinshinsya.com/>

大阪本社 〒543-0043 大阪市天王寺区勝山 2-12-2
TEL 06-4305-2540 FAX 06-4305-2543
東京オフィス 〒141-0031 東京都品川区西五反田 7-22-17 TOCビル 9F50
TEL 03-3779-3374 FAX 03-3779-8690

古事記の天地創造では、靈（エネルギー）が集中する中心ができると、エネルギーの凝縮と拡張によって「産靈（むすひ）」の活動がはじまり、次々と万有（物質）万象（エネルギー）が生まれ成ってきたと解釈しているのだ。そして、この活動が今も連綿と続き天壤無窮に続くというのが、日本民族の宇宙観であり、思想・哲学の根源である。

欧州原子核研究機構の科学者たちも、「エネルギーの強烈なる凝縮と衝動で宇宙が創造された」という日本の神話の天地創造には極めて興味深意ということだった。

宇宙創元のエネルギーの神に「産靈（むすひ）」という呼び名を使っているのが重要なところだ。ここで言う「産靈（むすひ）」とは、エネルギーが何かを産む（生成する）働きと捉えられる。

例えば、人間が子供を産むという行為も、宇宙の創造の原理に基づく、天地創造の延長線上にある営みと捉えて、「産靈（むすひ）」と

呼んだ。男女が契りを「むすぶ」の語源である。生命エネルギーである霊が肉体（物質）をもって生まれるので、「産靈（むすひ）」が「産子（むすこ）」または「産女（むすめ）」に成る。霊を授かった男子を「靈子（ひこ）」、女子を「靈女（ひめ）」と呼ぶのもこうした考えによる。

また、日本の場合、お腹の中に霊を授かった時点から、エネルギー生命体としての年齢を数えるので、出産の時点では「歳」としている。

現代では「物質」として母の肉体から「分離」した時点を零歳と数えているが、母のお腹に霊を授かった時を零歳と数える伝統的な日本の考えの方が、人を単なる物質ではなく宇宙創元のエネルギーを継承する霊的存在としてみているということである。

日本人は、生れた時に授かった元々の力強いエネルギーのことを「元氣」と呼ぶ。

そして「元氣」が持続している限り、人は成長を成し続けると考

えられてきた。逆に言えば、元氣が枯れてしまうということは、エネルギーが枯れることを意味し、人の成長は止まり、「氣枯れ」すなわち「穢（けが）れ」ることになり、本来の創造活動が停止された状態になると考えられた。

このように神道では、次から次へと新たに生み成す創造活動をよしとし、逆に、創造をしない状態は「禍（まが）つく」とか「穢（けが）れ」、創造を妨害する行為は「罪・咎」として忌み嫌うのである。

だから、宇宙に生まれ、宇宙に生き、宇宙に（物質としての肉体が）死ぬ人間にとって、「産靈（むすひ）」という言葉は、宇宙本来の活動の一端を担い、新たな創造をつくりだすポジティブなものであり、男女が結ばれて子供を作ることとは、大変めたいことなのだ。物質としての肉体は滅びるが、その間に、子供だけではなく、社会に新たな霊（エネルギー）を生み出し、自らも霊に帰る「生こそ本分を尽くした」といえる。

戦いが創造を生む武道の発想

武道において剣と剣を斬り合わせることを、「斬りむすび」と呼んでいることにも、この考え方が表れている。

この発想は、「斬り殺す」、つまり相手を斬って捨ててしまえばいいという考えとは正反対のものだと言える。「斬りむすび」とは、相手の矛や太刀をむすび止め、双方のすさまじいエネルギーを、殺傷と破壊ではなく創造に向かわせしめようという行為だ。

相手と生死をかけた戦いの先にさえ、何らかの創造を生み出していくべきだ、という思想がある。

天象や地象にも和荒があるように、人と人の関係においても、親睦と紛争は避けがたい面がある。

であれば、人間の行為の結果に過ぎない平和や戦争という現象の好き嫌いを論じるのではなく、やむなく戦ったとしても、共和の道を探ろうとすることの方が重要なのだ。

将来に希望が持てない日本

武道が単なる戦闘の技術を教える格闘技と異なるのは、こうした思想が根本にあるからだと言える。相手を殺傷し破壊するだけの戦いであれば、社会全体が荒廃してしまう。

平和時における創造、戦いにおける創造という性質を探索していくのが武道の本質であり、日本人が戦いの中に「むすび」という言葉を使った所以である。

言葉を変えれば、平時においても戦時においても「和する」、すなわち敵さえ包容同化し一体となり、共生する道を理想とするのだ。

その根源には、宇宙は前述の通り一体として生まれたのであるから、本来は全体が一体的な継続した活動であるという考えがある。宇宙が創造された時から現代を経て未来までの全体を一体的に捉えるならば、今を生きる我々も宇宙の創造を継続するために生きる存在であるということを知るであろう。

共助的な社会の実現を目指せ

里山資本主義などが話題を呼んでいるが、伝統的な共助社会が壊れてしまった現在、このような新たな共助体を作る動きは注目に値する。政府や行政機構に依存しない、「新たな共助の家の再生」である。

共生する社会にエネルギーが充実すれば、その社会に住む人々は幸福感を覚え、色々な創造活動を展開する。それによって、社会はさらに発展し、次なる創造のエネルギーが生まれる。

社会の基盤となるエネルギーは、共助的なシステム、すなわち「他者の役に立っている」自分は社会で必要とされている」という自覚を持てる社会でこそ生まれるものである。

こう考えていけば、社会を再生するための最も重大な原理は、いかにして「新たな共助の家」を再構築するかということになるだろう。現在は、公的機関が担っていた事

業を民間企業に移譲することを進めているが、これは、中央行政政府の監督権は保留しながら、収益権を市場に分権しているわけで、市場での収益に預かることのできない一般国民は、無権者すなわち現代の奴隸状態に陥る。

そもそも、中央集権が進みすぎると、地方行政まで画的になる。さらに、国民一人ひとりの政治行政に対する自己責任感を鈍らせ、公権力への依存心を助長させ、ある

いは不平不満の念を強くする。また、中央の政争が地方や家庭の中心まで入り込み、共助体は分断され相争うようになる。これは、伝統的日本社会の崩壊につながる。

共助社会とは、政府や、地方行政の権限を思い切つて国民にゆだねることだ。国民が主体的に、福祉、教育、防犯防災、保険防疫等末端の自治行政機能を遂行する仕組みである。ここに法的権能を与えれば、無駄なお金も、無駄な公的

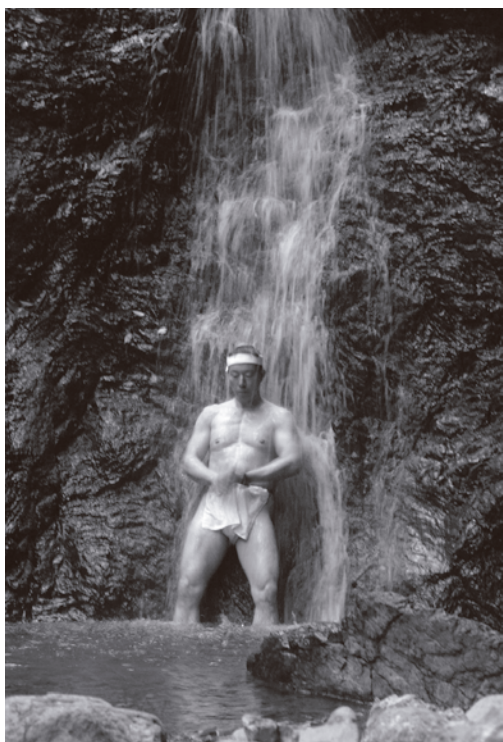
機関も、利益主義の民間企業も必要になる。なにより、国民が心をひとつにして社会を運営し、自助努力で安心安全を獲得できる。

個別の空虚な議論より、われわれ日本人は、どのような社会を創ろうとしているのか、世界はどうあるべきなのかをしっかりと見据えるべきだ。

日本は神武建国以来、お互いに共助し合い、創造と成長を促す家のような社会の実現を目指してきた。その精神を継承する今上陛下

は、常に、国民が心をひとつにして、ともに助け合い、未来を創る社会を国民に呼びかけている。天皇陛下の大御心に副い奉るのが日本の真性保守である。日本のあらゆる政策はその方向に焦点を当てるべきであらう。

世界にも共助的な社会を目指す運動が広がっている。今こそ日本人は、伝統的共助社会の理念を人類普遍のエトスとして、国内外に広める時である。



「ヒーローを求めての旅」

羅南 真



後藤 又兵衛

子供の頃、英雄・豪傑の物語を手当たり次第に読みまくった。なかでも関ヶ原の合戦後の大阪城に集まった豪傑たちの物語は格別だった。それは、時の権力に立ち向かうために一〇八人もの豪傑が次々と梁山泊に集まってくる『水滸伝』、あるいは主家再興に立ち上がった八人の勇士を描く滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』を思わず煌びやかな群雄の活躍が見られたからだ。

大阪城にも名の知れた武将や豪傑が次から次へと集まってきた。岩見重太郎の名で知ら

れる薄田隼人、美貌の若武者木村重成、塙団右衛門、長宗我部盛親、明石全登、真田幸村、後藤又兵衛などなど。この中で今日でもよく知られているのは真田幸村ではないだろうか。幸村についてはいろいろな面白い話が作られ、伝えられているが、恐らくほとんどはフィクションであろう猿飛佐助、霧陰才蔵、三好清海入道らそれぞれユニークな十勇士の活躍ぶりにも大いに胸をわくわくさせられたものだった。しかし、幸村と真田十勇士については次回取り上げるとし、今回は後藤又兵衛の

ついて述べてみたい。今ではほとんど忘れられている人物だが、当時は知名度抜群、幸村以上に評価の高い男だったからだ。

名参謀黒田如水の下、 知勇兼備の武将に育つ

後藤又兵衛基次。父は別所氏に仕えた武将で、豊臣秀吉に攻められ三木城で討ち死にした。籠城に当たって死を覚悟していた父は息子を黒田官兵衛（如水）に預けたので、又兵